

土地の記憶と物語の力 : 郊外の文学社会学
のために(2)

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / 社会志林

(巻 / Volume)

62

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

115

(発行年 / Year)

2015-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021193>

土地の記憶と物語の力

——郊外の文学社会学のために（２）——

鈴木智之

第3章 越境の場所——『犬婚入り』の「町」を歩く

私は、場所は「ほぼ完全に」消えたと言う。つまり場所は決して完全に消えたわけではなかった。ハイデガーが言いそうなことだが、それがまさに隠されているということの一部は、少なくとも部分的には隠されていないということを含むのである。（エドワード・ケーシー『場所の運命』）

1. 現実空間の「写像」としての物語空間

小説のテキストを携えて、物語の舞台となった郊外の空間を歩いてみる。これが、以下に継続される課題である。

しかし、私たち読者が小説のテキストの外部に出るということは、作品世界の経験においてどのような意味をもつのだろうか。物語、とりわけ虚構^{フィクション}としてさしだされた物語は、実生活上の現実に対して自立的な小宇宙を形成する。物語世界は読書という行為を通じてはじめて立ち現れるものであり、その意味は基本的にテキスト内在的に読み解かれるしかない。それを“外的現実”に結びつけることによって、私たちはどんな認識を得ることができるのだろうか。

この問いは、文学や物語という対象の固有性を考える上で、常に否定しがたい重要性をもっている。確かに私たちは、文学テキストが構成する意味世界を、その外部の現実に還元してしまうことはできない。しかしながら他方で、物語空間がしばしば、外的空間との対応関係を有していることもまた否定しがたい。そして、テキストだけを読んでいる時には十分に見えてくることのない二空間の関係をたどっていくことが、時に作品の成り立ち方を知る有力な方法になりうる。それを非常に見事な形で示したのは、前田愛『都市空間の中の文学』（1982年）であった。

前田は、文学作品を読むという経験が夢の中の空間に入り込むことに似ていると語る。「理想的」な読書においては、「作品の世界に没入している間、読者が周囲の現実と交信する意識のスイッチは切られている」のであり、そのとき作品空間は、「日常的な意識の輪郭がとけ出して行くあわいにすべりこんでくる夢の世界」（前田 1982 : 11）と相同的なものである。読者は、日常的な経

験の世界から隔てられている特異な空間、テキストの「内空間」を生き始めるのだ。

しかし、テキスト空間は、その外部に広がっていると想定される空間、たとえば都市空間の「写像」として成立している。それは、外部空間の現実を変換する独自の「関数式」にしたがって構成される。そのことが最も明瞭に見えるのは、実在の地名が挿入されているような都市小説においてである。

私たちがまだ訪れたことがない都市であっても、小説のなかで出会う街の名前には、空想をそそりたててやまないふしぎな色彩や響きがこもっているが、その一方で、作中人物の動きにそって紹介される街の名や通りの名や橋の名の連なりは、都市の解読についやされた作者の精神の歩行を解きほぐす糸口になる。(同上：24)

文学テキストのなかに呼びあつめられた地名は、現実の都市空間と虚の言語空間とが相互に浸透しあう界面であり、その集合は言語の次元に変換された都市、いわば「言語の街々」(篠田一士)を支える底辺をかたちづくっている。(同上：24)

「文学作品が提供する特定の場所をめぐる情報や風景のイメージは、テキストの『内空間』を構成する素材ではあるものの、『内空間』そのものではない」(同上：25)。しかし、都市空間を語るテキストは、それ自体、作者がその空間を読み解いていく営みの所産であり、「書く」という行為を通じて現出する、外部空間の「変換系」である。その変換のプロセスを「解きほぐす」ような読み方があってもよい。実際に『都市空間の中の文学』は、作品に描かれる街を歩きながら、テキスト空間の重層的な構造を浮かび上がらせる卓越的な「読み」を提示している。私たちもまずは、前田に倣って、現実空間の変換式の読解を通して、作品の成立過程を明らかにすることにつとめよう。

2. 物語空間の「原因」としての現実空間

しかし、物語空間が現実空間の「変換」によって成立していると言う時、前者を後者の「写像」として位置づけるだけでは十分ではない。それは同時に、現実の空間の中から物語が生起するということであり、さらに強い言い方をすれば、その場所が物語を生みだしている、と見ることもできるからである。私たちはここで、外的空間がある特異な形で虚構の物語の「原因」となる、という視点を得ることができる。

物語の書き手(作家)は、自らがそこに投げ込まれ、それを生きている空間を読み解き、これをテキスト空間上に再編成しながら作品を構成していく。この時、二つの空間の結びつきが強い意味を獲得するとすれば、それは、空間的現実が物語の発生をうながす要因として書き手に働きかけるからである。このような場合、作家は物語の原因(創造主体)ではなく、むしろ空間(現実)と空間(作品)をつなぐ媒介者の位置に立っているとと言ってもよい。書き手を媒体として、土地あるい

は場所が物語の産出主体となるのである。

そのためには、おそらく、現実の空間が物語的な意味をともなっているだけでは十分ではない。人々は確かに、環境世界を物理空間としてだけでなく、生活文脈に即して意味のある場所として経験している。この時、生活自体が出来事の継起の中で形作られていく意味の織物である限りにおいて、現実空間は何らかの物語性を帯びたものとして組織されている。空間は、人々が生きている物語の一コマに関わることによって“場所性”を獲得するのである。しかし、現実の世界に物語の意味が充填され、それが人々の生活を十分に包摂するものであるならば、そこに新たな物語が、リアリティ構成の次元を変えて生起する理由は乏しいように思われる。では、すでに物語の舞台として生きられている空間が、異なる次元においてさらに物語を生みだすとすれば、それはどのような事情によるのだろうか。やや図式的に単純化すれば、それは日常生活世界を語る私たちの言葉——通常の語彙や文法——には収まりきらない何かを経験されたり、慣習的行為の文法では対処しきれない問題に出合ったりして、その経験が日々の現実を構成する語りとは異なる、別様の物語を要求するからではないだろうか。“現実”の内部では十分に処理しきれない何らかの緊張が生じる時、これを起点として“虚構”の物語が立ち上がる¹。このような視点に立てば、物語空間の外部にこそ、その物語の生起をうながした「原因」が存在することになる。私たちが“虚構”の世界の外に出かけていくのは、このような意味で“物語の生まれる場所”を探しに行くということである。

その場所がどこに、どのような相貌で私たちの前に現れるのかは、事前には分からない。ただし、その手がかりはやはりテキストの中にある。物語の起動をうながした緊張や葛藤は、その痕跡を何らかの形で物語世界の中に残しているからである。例えば、物語世界の中に表れる“亀裂”や“空白”，物語の意味が過剰に集中する場所（狭義の「クロノトポス」）。こうした（物語空間内の）手がかりに対応する形で発見される（現実空間上の）場所に、私たちはその物語を生み落した「原因」を見いだすことができるはずである。そこには、物語の生起をうながすような“緊張”，あるいはなにかがしか“穏やかならぬもの”が潜んでいるに違いない。“現実”の意味空間に穿たれているその危険な“隙間”，しばしば目にとまりにくい“小さな闇”。そういった場所を探して、私たちは現実の空間を歩くことになる。

そして、その作業を通じて私たちは、作品世界だけではなく現実空間をもまた、それまでとは別様にとらえることが可能になるだろう。その場所が“物語”を生み落したものとして再発見される時、それは日常生活の中では十分に意味づけられない“特異な体験”の場として立ち現れてくるかもしれない。そのようにして、郊外の空間との関わりを刷新すること。ここに、探索のもうひとつの目的がある。

以下、そんな危うい期待を抱きながら、多和田葉子の小説『犬婿入り』の舞台となった「町」に足を踏み入れることにしよう。

3. 「町」を探す——立川・柴崎から矢川・谷保あたりへ

(1) 「町」の原型となる地域

小説のテキストが、どこかに実在する空間をそっくりそのまま、物語の舞台として再現していると考えねばならない理由はない。『犬婚入り』の「町」についても同様である。むしろ「町」は、そのきわめて図式的な造形からもうかがえるように、ある意味で“郊外”なるものの縮図であり、戯画である。しかし、その一方でテキストは、この「町」を任意の、匿名の場所として設定しているわけではない。前章に引いた「町」の様子を示す一節（『犬婚入り』：89-90）を読み返してみよう。私たちはここに挙げられているいくつかの固有名詞（多摩地区、多摩川など）や具体性をおびた手掛かり（〈日本橋から八里〉と刻まれた道標、竪穴式住居の跡、稲作の伝統、宿場町としての繁栄など）から、ある程度まで物語の“舞台”を絞り込むことができる。

この時、私たちが「町」を探して訪ねるべき場所は、立川駅周辺とその南側の柴崎付近、そしてそこから東に移動して、JR南武線の矢川、谷保駅の南北にまたがるエリアである。

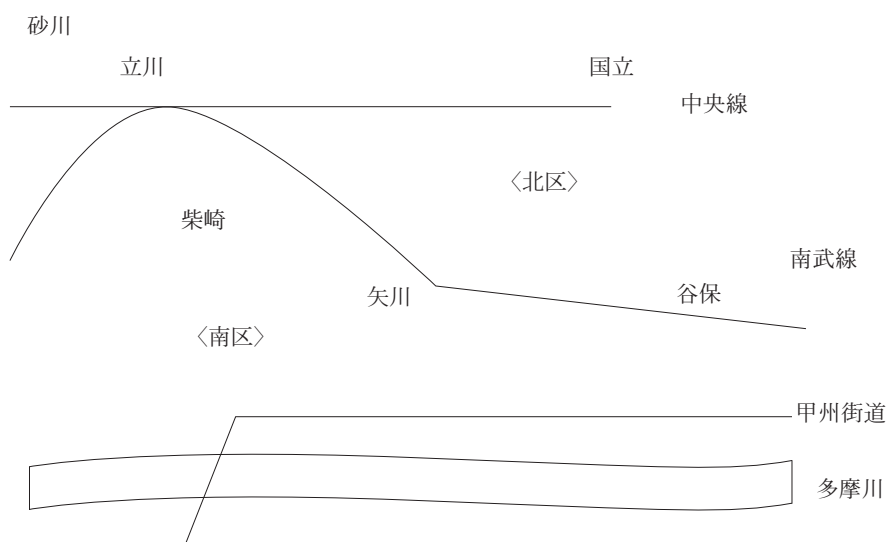


図1：「町」の舞台となる空間

もちろん、物語の舞台は現実の地理的空間の忠実な反映ではない。既述のように、それは実在する都市空間（場所）を変換して構成した「写像」である。

実際に歩き回って探査してみると、『犬婚入り』については、作品中の「町」と現実の「町」との対応関係がある程度具体的に絞り込むことができる。以下に少しずつ確認されるように、「北区」のモデルとなるのは南武線の北側に点在する「矢川北アパート」や「富士見台（第一～第三）団地」であり、「南区」は、南武線の西南に広がる「国立市谷保」「矢川」「青柳」から「立川市羽

衣町」「錦町」「柴崎町」までのかなり広い範囲をトレースしている。作品中の「町」には、小学生が歩いて塾に通うことができるような、限られた空間的広がりを与えられている。しかし、実際にはもう少し広い範囲に散在する風景や事物が、「町」の中にあるものとして移し替えられているようである。それを踏まえてみると、「町」は、広域の対応関係としては、JR中央線と南武線の立川から矢川・谷保にいたる幅の中で、その北と南に広がる光景をとり込んで、凝縮的に造形化されたものと言える。

そして、その中からさらに限定して「町」の所在を特定しようとすることもできる。この時、候補となる場所が二か所ある。ひとつは、谷保駅の北側に作られた富士見台団地（＝「北区」）と、駅の南側に位置する谷保天満宮周辺の地域（＝「南区」）。もうひとつは、矢川駅の北西の「矢川北アパート」（＝「北区」）と矢川駅南口から「矢川緑地保全地域」あたりに広がる区域（＝「南区」）である。『国立市史』によれば、富士見台団地への入居が昭和40年（1965年）。国立市議石井伸之氏のHP（<http://blog.goo.ne.jp/ishiinobuyuki>）によれば、都営矢川北アパートの建設は、昭和43年～45年（1968～70年）。いずれも、作品中に示された「30年前から人が住み始めた」団地という記述に適合する。



〔1〕 富士見台団地（国立市富士見台）



〔2〕 谷保天満宮（国立市谷保）



〔3〕 矢川北アパート（国立市富士見台）



〔4〕 矢川緑地保全地帯（立川市羽衣町）

作品中の「町」に書き込まれた「鉄道」という境界線の意味も、実際にその土地に足を踏み入れ、歩行者の視点から眺めてみると、ひととき鮮明なものになる。

例えば、JR 南武線・谷保駅から、北口の階段を降りてみる。小さなロータリーからまっすぐに銀杏並木が伸びて、2～3分も歩けば富士見台第一団地である。団地に付設されたマーケットには、床屋、美容室、文具店、電気店、喫茶室…（それは、“昭和”の匂いのする空間である）。団地の中に足を踏み入れると、方形の広場に面して郵便局と集会所。直線的なデザインに貫かれた典型的な5階建ての「団地」の風景が広がる。そして、広場にはごみひとつ落ちていない。清潔に、丁寧に管理されていることが、その景観からもうかがえる。

そこから南へ引き返して、駅のホームの西側に位置する踏切を渡ってみる。雰囲気が一変する、とまでは言えないとしても、地域性（土地柄）の落差は確かにある。景観を構成する要素として明らかに違うのは、以前には農家であったと思われる、あるいは今も農業を営む家は何軒も並んでいることである。平家の瓦屋根の屋敷、低い石垣に支えられた広い前庭。そこに根を下ろした梅や木蓮や椿の木々、納屋や蔵、屋敷を囲む竹林。そして、それらの家々の中には廃屋となっている建物も見受けられる。住民と土地との時間的な結びつきの違いが、その家屋の形態や築材に歴然と表れている。そして、線路の手前からすでに谷保天満宮の大きな鳥居と、それを囲むさらに背の高い木々が見える。鳥居をくぐったところから、急な傾斜で土地が下がっていることがうかがえる（木

立と土地の起伏に守られて、この平面からは“見えない”空間、その意味での“闇”が広がっている)。

矢川駅の周辺にも、同じような対照性が感じられる。やはり、駅舎の北側に小さなロータリーがあり、そこから桜並木が北側に伸びている(矢川通り)。2～3分も歩けば、スーパーマーケット(ピーコック)とハンバーガーショップ(マクドナルド)の入った商業施設にぶつかる。その隣りに見晴らしのよい児童公園が広がる。矢川通り沿いには、外食のチェーン店、ドラッグストア、古本チェーン店など、郊外のロードサイド型の店舗が多い。その意味で格別の卓越感はないが、比較的新しく商業化されたエリアであることがうかがえる。これに対して、駅前のロータリーを左手(西側)に向かうと、「矢川メルカード」と名づけられた少し古風な商店街に入る。和菓子屋、花屋、電気店、居酒屋、洋品店、酒屋、パン屋、米屋が軒を連ねる。その先がすぐに「矢川北アパート」で、これに隣接して八百屋、肉屋、魚屋、床屋が並んでいる。やはり“昭和”の気配が漂うエリアである。

矢川北アパートは、南武線に沿って東西に広がっているが、駅前の踏切を逃すと、その団地の西の端まで線路を渡るルートがひとつも設置されていない。導線設定において、団地の住人が鉄道の南に向かうことがまったく想定されていないように見える。その西端の踏切(青柳踏切)を渡り、坂を下るとすぐ右側(西側)に「矢川緑地」の入り口がある。ここもまた子どもたちの遊び場であるが、北の児童公園との対照において、鬱蒼とした木立に囲まれ、視界が遮られている様子が印象的である(緑地は郊外の住宅地の中に小さな“闇”を温存している)。

この踏切の南北で、街並みの外観は一変する。車でのすれ違いに苦勞するほど道幅が狭くなり、蛇行し、入り組んでいる。古い農地と水道(矢川)に沿って作られた道筋がそのまま生きており、その両側にばらばらと(無計画に)個人住宅やアパートが建造されてきたことがうかがえる。

両地点を通じて、南北の顕著な違いは、農地の残り方であろうか。南武線の北側にも畑は点在するが、その比率は線路を渡ると目に見えて大きくなる。今もなお、農地をつぶして宅地化が進行中であることが実感される。そして、北側の団地は、かつての地形や土地利用の痕跡をまったくとどめない形で整地され、その上に建設されているのに対し、南側では、近世以来の農村の地形が塗りつぶされることなく、これに沿って宅地の造設が進められてきたことが分かる。

次の写真は、鉄道の南、国立市谷保6500番地付近から北側を撮影したものである。南武線の列車が通りかかり、その手前には農地が広がり、その向こう側に見上げるような形で矢川北アパートの上層部が見える。鉄道は、地域間の明確な境界線の役割を果たしている。



〔5〕境界線としての鉄道（国立市谷保）

（2）作品を構成するアイテム

作品中に登場するより具体的なアイテムについても、これに対応する場所や物をこのエリアの中に、またはその周辺に発見することができる。

① 〈日本橋から八里〉

甲州街道は、上に示した広域のエリアの南端を、多摩川沿いに走っている。かつてそれは、現在の柴崎体育館の裏手あたりで「日野の渡し」に至り、舟で多摩川を越えて対岸へと続いていた。厳密に言えば、過去にさかのぼってもこのエリアの内側に「宿場」は存在していない。宿場町であったのは、対岸の「日野宿」であり、江戸方面にひとつ戻れば「府中宿」になる。しかし、それでも、街道を往来する人々、「渡し場」において舟を待つ人、乗り降りする人の姿は確かにあったはずである。距離として見れば、日本橋から柴崎の「渡し場」あたりまでの距離は、約37キロ。「八里」よりはわずかに長い。

旧甲州街道の「日野の渡し」近く、現在の柴崎体育館の裏手には「道標」が存在していた。現在それは、立川市歴史民俗資料館の裏庭に移設されている（三角形の石造りの道標で、「左 甲州街道」「右 はいしま 五日市 みち」と刻まれている）。しかし、作中に言及されているような〈日本橋から八里〉の道標もまた、実際に立川付近に存在する。ただしこれは、かなり思いがけない地点にあり、立川駅の北側、立川街道沿いのかなり大きな屋敷の庭先に建てられている。上に示した「南区」の対応エリアからは外れている。



〔6〕 日本橋から八里（立川市栄町）

ある個人のホームページの情報によれば、この木造りの道標は、かつて実際に使われたものではなく、この屋の主が個人的な趣味で建てたものであるらしい。

(<http://blog.goo.ne.jp/opn2goo/e/e753d59a0044638193f5e73b4c24186c> 参照)。

このように、正確に言えば、作品中に盛り込まれたアイテムのすべてが該当エリアの中に存在するわけではない。それは、周辺（多摩川の対岸や駅の北側）の地域から持ち込まれて、「町」のかつての姿を髣髴とさせる要素として利用されたものと見ることができる。

② 稲作の伝統

現在、東京都は米の生産量においても作付面積においても全国の都道府県の最下位に位置し、立川から国立にかけても「水田」はごく一部に点在するにとどまる。しかし、歴史的に見れば、このエリアでは相応の規模で稲作が行われてきた。

徳川家康は江戸に幕府を開くとすぐに、江戸近郊の農村の整備に乗り出している。立川駅の北側。かつては砂川村と呼ばれた地域では、1600年代から新田開発が始まる。ここに水を供給したのが、多摩川の源流のひとつである残堀川と、1650年代に作られた玉川上水であった。玉川上水は、四代将軍家綱の時代に、玉川庄右衛門と静右衛門の兄弟を中心に開発された。多摩川上流の羽村から四谷までの水路。江戸に水を供給するための水道路は、沿路の農村開発にも大きく貢献した²。同

じ時代に、水路は現在の駅の南側にあたる柴崎村にも引かれている。だが、稲作の始まりは、柴崎のほうが早いと言われる。残堀川という自然の水源地がそこにあったからである（立川市教育委員会1977）。

同様に、国立市の南部にあたる谷保周辺も、水利的条件に恵まれ、稲作が行われた地域であった。1952年（昭和27年）の地図を見ると、甲州街道以南の低い農地（多摩川の氾濫原にあたる）には「田」であることを示す記号が付されている。



（昭和二十七年地理調査所発行の二万五千分の一の地図を部分縮小）

図2：昭和27年地図 『国立の生活誌』より
（国立市民具調査団 1983：目次ページ）

ただし、地味が痩せているため、それほど豊かな収穫があったわけではないと『国立市史』には記されている。1913年（大正2年）の谷保村の「地目別構成」によれば、「田」の面積は村全体の17%で、これは大正時代を通じて大きく変化していない（国立市史編さん委員会1990：48-49）。戦後の農地改革の中でも、稲作は続けられていくが、都市化と宅地化の進行の中で農業人口は次第に減少していく³。そして、『犬婿入り』に記されている通り、この地域の米作に決定的な打撃を与えたのが、カドミウム汚染であった。周知のように、「イタイイタイ病」が公害病としての社会問題化していくのは、1950年代後半のことであったが、国立市内の水田で工場廃液による汚染が顕在化したのは1967年、そして1970年には谷保地区の田んぼからカドミウムが検出されるにいたる。米作農家は、東京都知事に対策を訴える陳情を行うが、「汚染田での稲作はやめて」「花や植木の栽培をするか、農耕をやめて転業してもらおうかする」という冷たい対応が返ってくるばかりであった

という。これに重ねて、1970年からは減反政策が始まり、農家の稲作離れが進行していくのである（同上：737-744）。

ともあれ、1960年代後半からの10年間は、米作に限らず、都市近郊の農業を取り巻く環境が決定的に損なわれ、農地が手放されていく時期にあっていた。高度成長期における「公害」の問題化と、東京西郊における大規模団地の建設、そして農地・水田の縮小。それは、多和田葉子が子ども時代を過ごした1960年代から70年代初頭にかけての、この地域の風景の変容を代表的に指し示す出来事であったと言える。

③ 竪穴式住居跡

「南」のエリア、特に多摩川の河原から段丘上がった丘の上には、縄文時代から旧石器時代にさかのぼるいくつかの住居跡が見つかっている。地誌学的に見れば、この地域一帯が位置している「武蔵野台地」は、「関東ローム層の研究などから、下末吉面、武蔵野面、立川面それに、青柳段丘をはじめとする沖積面の、4群の段丘面より形成され」ている。武蔵野面は、「古多摩川が形成した扇状地面」で、ここから国分寺崖線と呼ばれる段丘崖に隔てられ、その下に立川面が広がる。この立川面の下位には、多摩川の左岸に沿って数段の段丘面が発達しており、その内のひとつが青柳段丘である。青柳面は、6.0～2.5メートルの懸崖（府中崖線）で立川面と隔てられ、さらにその下部に、多摩川の氾濫原が広がっている（立川市大和田遺跡調査会1983）。

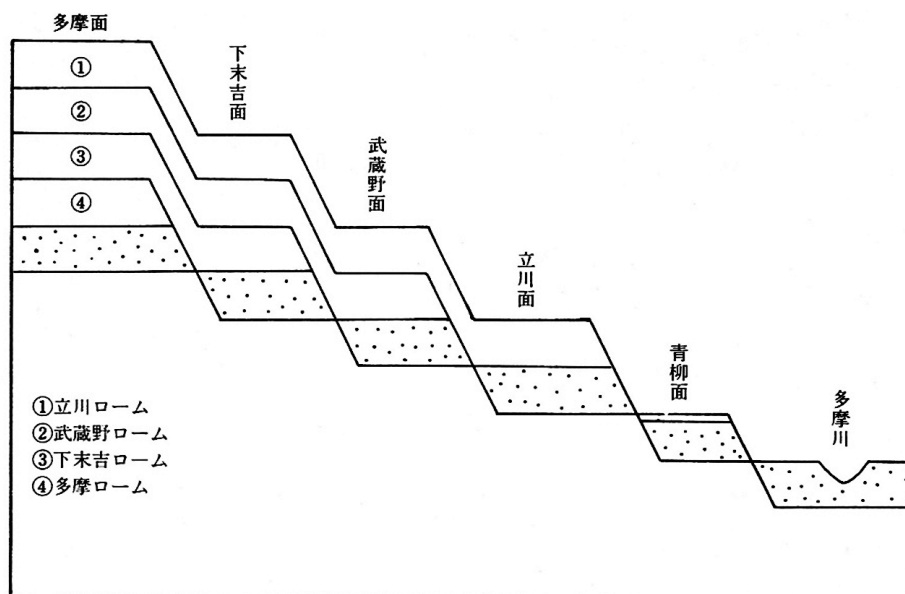


図3 関東ローム層の断面模式図
(立川市大和田遺跡調査会1983：5)

府中崖線、および青柳段丘と氾濫原の境界面には多数の湧水が見られ、この水を利用して、縄文時代から人々が居住地を形成していたと考えられる（立川市向郷遺跡調査会1992：3）。

その住居跡のひとつが、立川市柴崎町4丁目に広がる「大和田遺跡」である。上述の地誌学的な区分では、青柳段丘上に位置する。1981年から82年にかけて発掘調査が行われ、縄文時代から奈良・平安時代までの遺構が発見されている。出土品の収集と遺跡の記述の後、現在は通常の土地利用がなされており、遺跡の所在地であることを示す説明ボードが駐車場の片隅に立てられているばかりである。



〔7〕大和田遺跡（立川市柴崎町）

また、立川市錦町4丁目には「向郷遺跡」がある。こちらは、立川面の縁、府中崖線上に立地し、南には矢川が東流し、やはり水に恵まれた立地であることが分かる。戦後の宅地造成の中で、一部の遺構が破壊されてしまったが、市営錦町住宅の建て替えが計画されたこととともなって、1985年から発掘踏査が行われている。現在は、その遺跡の上に、箱形の集合住宅が建造され、やはり敷地内の駐車場の隅に、遺跡所在地であることを示す説明ボードが置かれている。発見された遺構の多くは、縄文時代中期の建築様式に該当するが、旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器なども出土している。人々は、縄文人の住居跡に、そのまま集合住宅を建設し、暮らしていることになる。



〔8〕 向郷遺跡（立川市錦町）

住宅地の中に点在する縄文時代の住居跡。その存在に目をとめるということは、この場所との関わり合いに、小さな二つの変化をもたらす。ひとつは、土地の形状とその自然史的な成り立ちに対する意識を呼び覚ますこと。上り下りしている坂道が、多摩川からせり上がる崖の道であるということ。そこには古くから日当たりの良い、水に恵まれた丘が広がっていたということ。現在の道筋は、その古代からの生活空間の配置と無関係に成立しているのではなく、部分的にはそれをなぞりながら微妙な曲線を描いているのだということ。

そして、これに結びつく形で、この土地に流れている（または蓄積している）時間が、日常的な意識のスケールから大きく拡張した形で、かつ線型的な連続とは別の形でイメージされる。今、集合住宅を建てて人々が暮らしている場所から、縄文時代中期の住居跡が発見されるということ。それは、約5000年前に、まったく同じ場所に人々が家を作り暮らしていたということである。その痕跡の上に、今の自分たちの暮らしがある。そのあいだの時を越えた、過去と現在の接合。居住空間を構成する時間は、歴史的・物語的なつながりの中で連綿と続いていくとは限らない。地層のように積もる時間のイメージがここに形成される。

4. 「町」の歴史的な成り立ち（その古い地層の露出）

「物語空間」と「現実空間」の対応関係は、こうした個別の物にのみ見いだされるわけではない。空間全体の醸し出す「におい」のレベルで、そこには「町」の気配が漂っている。とりわけ南武線

の西南地域を歩いていて「南区」の雰囲気を感じるのは、あちこちに「都市の歴史の古い地層」とでも呼ぶべきものが露出しているからである。

ここで、立川という町、そして国立という町がどのように発展してきたのかを見ておく。

(1) 「立川」の成り立ち

先に見た遺跡の存在からも分かるように、現在の立川市域には旧石器時代・縄文時代から人が住んでいたことが知られている。古代には特記されるような歴史的事実の痕跡はないが、柴崎町の諏訪神社は822年（弘仁2年）に建立されたと伝えられており、この付近に村落が形成されていたと推察される（立川市教育員会1977：21-22）。平安時代の後期から、関東には武士と呼ばれる人々が勢力を張るようになる。その中で、「立河氏」または「立川氏」と名乗る一家が勢力を伸ばし、鎌倉武士として力をふるうようになる。この「立川」という家の居住地が、現在の「普濟寺」あたりであった（立川市柴崎町4丁目）。この寺に行くと、屋敷を囲んでいた城壁の基礎を見ることができる。しかし、立川氏は、豊臣秀吉によって滅ぼされる。その後江戸時代には、徳川幕府の天領として農村開発が進む。近世においては、比較的豊かな農村地帯であったと言われる。

●立川の近代

近代化の過程で、立川近辺が変貌を遂げていく契機になった出来事がいくつかある。ここでは、3点に目を向けておこう。

① 養蚕と製糸産業

ひとつは、江戸時代の後期から始まる絹糸づくりである。『立川市史』によれば、「養蚕業が農家の副業として全国各地に行われるようになったのは江戸時代中期以後」であり、「武蔵野地域で養蚕業の地位が確立したのは19世紀になってから」のことであった。「砂川村」においても、「安政年間」（1850年代）からすでに養蚕業が地域に根を下ろしていたことが知られている。明治以降、品種の改良に成功したこともあり、砂川産の桑苗の需要が高まって、他の畑作物から桑苗生産に転換する農家が増え、しだいに「村の特産品」となっていった（立川市史編纂委員会1969：1114-15）。養蚕業とともに製糸業も勃興し、幕末期には「砂川太織」と呼ばれる藍染の太織が生産され、繁栄を示すようになった（同上：1117）。明治期には、家内工業としての製糸業のほかに機械製糸工場も設けられ、生糸の産出がなされていた。

② 鉄道の敷設：中央線

第二の大きな転機は鉄道の敷設によってもたらされるが、鉄道に先立って、明治2年には玉川上水に船を浮かべ、糸や織物を運ぶということがなされた。しかし、水を汚すということで中止になる（立川市教育員会1977：84-86）。1883年（明治16年）ごろ、玉川上水の堤を利用して新宿-羽村間に馬車鉄道を敷設しようという案もあったが、東京府の許可を得ることができなかった（立川市史編纂委員会1969：911）。これに代わって、新宿から五日市街道沿いに羽村を経て、将来的には八王子、青梅、甲府まで馬車鉄道を通すことを見通して、「甲武馬車鉄道株式会社」の

設立がはかられる。この計画に免許が下りるのが、1886年（明治19年）。現在の中央線の前身にあたる甲武鉄道が新宿 - 立川間に営業を開始したのが、1889年（明治22年）のことである。甲武鉄道は、多摩川の砂利の輸送に関わる貨物事業に支えられ、順調に収益を上げていく。

③ 飛行場の建設と空都としての発展

東京の西郊、多摩地区の歴史的発展を考える上で見落とすことができないのは、飛行場が数多くつくられ、空軍の拠点として利用されてきたということである。中でも立川は、「空の都」、「空都」としての発展を遂げてきた町である。「空都」とは「空軍力のある航空部隊が常駐する飛行場を基本として、航空工廠、航空研究所、乗員や機体整備員の養成を目的とする航空学校、整備学校など、防空軍事施設の集積と、航空機会社工場の労働者など人口の増大が見られる、防空軍事都市をさす」（鈴木 2012：9）。周知のように、国際的な武力闘争の場で「航空機」が重要な兵器となるのは、第一次世界大戦からのことであったが、日本軍も第一次大戦後、急速に「空軍」の整備に力を入れていくことになる。国内最初の「空都」は所沢に構築され、東京の西郊では、その次が立川であった。

1921年（大正10年）立川飛行場の建設（陸軍航空第五部隊の常駐）

1928年（昭和3年）陸軍航空本部技術部の設置

1930年（昭和5年）石川島飛行機製作所が航空機生産を開始

「日中開戦後、多摩には〈空都〉立川を中核に、陸軍の防空軍事施設、民間航空機会社の生産工場がまたたくまに集積され、労働人口などが爆発的に膨張して都市化が加速、全体的に、多摩の防空軍事都市化が進行し、昭和15年ごろには、多摩は〈空都〉の内実を整えるようになる」（同上：50）。

● 「基地の町」

立川周辺は戦前から軍事基地化が進み、軍需産業における労働力需要の高まりに応じて、人口の増加を見る。しかし、またそれゆえに、戦時中は空襲のターゲットになった。敗戦後は、米軍が立川基地を接収し、進駐軍による多摩川の砂利の採取なども行われるようになる。他方、陸軍航空隊の解体と飛行場の接収、飛行機工場の解体がなされ、雇用口が激減し、人口の減少を見る。失業者が増加し、復員兵がこれに加わる状況の中で、軍需物資を商う「闇市」が立川駅周辺に形成される。その様子を『立川市史』は次のように記している。

こうした闇市は早くも昭和20年10月頃から、戦時中に強制疎開をしていた立川駅北口前の疎開跡の広場に露店や、テント張りの立売店が立ちはじめていた。現在の立川駅前交番附近から、中武ビルの附近一帯に露店が高松町通りに向かって一列に並びその背後にもう一列並んでいて、それぞれ二列の店と店との間に細い道が通っていた。そこではおでん・食料品・衣料等が売られていた。物々交換をしている店などもあって、米、粉などがその当時の最良の交換品であった。（立川市史編纂委員会 前出：1162）

一方、南口側にも北口の場合と同じような露店が出現し、「まんじゅう等の食料品、衣料品、野球

で使うグローブ、ミット、卓球用具等が並べられ、主として物々交換によって売買されていた」。しかし、その周囲は主に桑畑で、現在の市役所の隣には「桐の木が茂っていた」（同上：1163）という。

このような状況下において、立川市は戦後しばらくの間は、好むと好まざるとを問わず、時流にしたがって、所謂「基地の町」化の途をたどらざるを得なかった。米軍立川基地の周辺には米兵を相手に取引を営む特殊女性の姿が激増し、昼夜をわかつた米兵と市中を徘徊し、酒と女とジャズとに明け暮れていた。（同上：1164）

これが、戦後の原風景であった。

その後に展開された、基地返還運動（砂川闘争、1855年～）が立川の戦後を考える上で大きな意味をもっていることは言うまでもない。しかし、『犬婿入り』の「町」の成り立ちを考える上では、その詳細に立ち入る必要はないだろう。結果として、1868年に米軍は計画されていた滑走路の延長をとりやめ、69年に横田飛行場への移転を決定。立川基地の跡地が日本側に返還されたのは、1977年のことであった。

その跡地を中心とした再開発が進んだ現在の立川の町で、「基地の町」の痕跡を見いだすのは必ずしも容易ではない。意識的にその雰囲気を残している（再現している）のは、北口の一面に設けられた「屋台村」ぐらいではないかと思われる。しかし、目を凝らして町を歩いていくと、ミリタリー・ファッションを多く扱う古着屋や、由緒ありげなジャズクラブなどが古風な看板を掲げて点在していることに気づく。住宅やレストランのあいだに申し訳なさそうに建っている古臭いラブホテルもその名残と言えらるだろうか。だが、いずれにしても立川の町は今、その“戦後”の記憶を払拭しつつあるように見える。

しかし、一連の土地利用の歴史は、今も地図の上にはっきりとその痕跡を残している。戦前から戦後にかけて、軍事的に利用され、返還後に開発されたエリアは、あらかじめ、農村的な土地利用の論理から切り離された「平坦地」の計画的整備が進んできた場所である。現在は、碁盤目状に広がる道路のわきに、新しい住居、集合住宅、ビルディングが建設されている（それは、立川駅の南北に広がる）。その周辺（北と南）には、軍に利用されなかった土地＝「農村」の風景があった。地図上には両者を分かつ明確な境界線が見える。北側（砂川地区）には、方形（短冊状）に並列する田んぼの形状をはっきりと読み取ることができる。南側（柴崎地区）では、畑の中を迂曲している道筋が数多く残存している。その「近世的な農村風景」の名残は今もあり、以前は農家であったことがうかがえる「古い構え」の家が、現代的な郊外住宅地のあちらこちらに見受けられる。

（2）「国立」とその三つのゾーン

現在の国立市域の中には、地域の歴史的な形成過程を異にする三つのゾーンを区分することができる。

立川市同様、多摩川沿いの段丘に沿って分布する遺跡群が縄文時代からの生活の痕跡を示してい

る（緑川東遺跡（青柳3丁目）、谷保東遺跡（谷保）からは縄文中期から後期、約4000年前の居住地が見つかった）。近世において集落が形成されていたのも、市の南部にあたる「谷保」を中心とするゾーンである。

① 谷保村

江戸時代からすでに、甲州街道に沿って農家や商家が点在していた谷保村は、田畑と雑木林が広がる農村であり、米、麦、粟、蕎麦や野菜の生産が行われていた。さらに、明治初年には桑を栽培し繭を取る養蚕農家が全体の5割を超えていたと言われる。また、多摩川・甲州街道筋の村であることを反映して、渡船業や陸上運送業に従事する人が多かったようである（国立市史編さん委員会、前出：4-5）。

明治期に入っても、その生活ぶりは大きく変わることはなかったように見える。『国立の生活誌—古老の語る谷保の暮らし』（1983年）には、谷保村で子ども時代を過ごした明治・大正生まれの古老たちの語りが多数収められているが、彼らの回想からは、（大正期から昭和初期までの）村の暮らしを支えているのは主として、養蚕を含む農業であったことが分かる。1917年（大正6年）に「石田」（谷保駅と矢川駅の間に位置する集落）の農家に生まれた男性は、「養蚕」が主で、「蚕」が不作になると現金収入がなくなり困ったけれど、「農家は、自分でとれた物を食べれりゃいい」と教えられ、日常的には必ずしも貨幣経済に依存していなかったこと、荒物や肥料の購入なども「^{かよいちよう}通帳」をつけて、いわば「つけ」で購入していたというエピソードを紹介している（国立市民具調査団1983：8-9）。1903年（明治30年）に下谷保に生まれた男性は、大正13年に結婚した当時のことをこう振り返っている。

私の連れ合いの家も農家。私の親戚は皆農家、どこも専門の農家ばかりだ。連れ合いは機もよく織った。織ったものは別によそには出さないのよ。蚕やっていて、嫁に来る時も自分で作った着物持って来たんでしょ。私の方もおふくろが糸を取って自分で織ってくれたんだから。そのかし不器用な品物よ、昔のもんだから。

私も若い時から畑が本当に大好きだった。百姓仕事で苦しいなんて思ったことは一度もない。朝はお天とう様と一緒に起きお天とう様と一緒にひまかく〔時間をとって仕事をする〕だ。蚕もやっていて、60貫（225kg）は取ったかなあ。糸にして出すと倍になるって、ばあさんと連れ合いが二人でやっんで、一人でさつま芋21俵（1俵45kg）三日でこしらえたこともあった。（同上：62）

市場に農産物を出荷して現金収入を得る一方で、相互扶助的な交換形態や、生活に必要なものは自分で作るという暮らしぶり（自給的な経済）が残っている様子が見て取れる。昭和初期までの谷保村は、近代化の波をかぶりながらも、その基本的な構えにおいて近世から続く農村の暮らしを維持していた。

この谷保村の生活に大きな影響を与えたひとつの要素は、やはり鉄道の敷設であった。既述のように、甲武馬車鉄道（現在の中央線）は、1889年（明治22年）に新宿－立川間の開業が始まって

いる。これが谷保村を通過する最初の鉄道であった。多摩川の砂利を川崎の臨海工業地帯に運ぶ目的で計画された「多摩川砂利鉄道」が、「南部鉄道」と改名して川崎－登戸間の操業を始めたのが1927年（昭和2年）、分倍河原から立川までの路線が開通し、谷保村に2本目の鉄道が通るようになったのは、1929年（昭和4年）のことである。これが、1944年（昭和19年）に買収され、国鉄南武線となる。電車はすぐに村民たちの日常の交通手段となったわけではなかったが、その主要な用途が「砂利」をはじめとする貨物の輸送であったことが示すように、鉄道の敷設は、近世的な農村であった「谷保」を、東京・川崎を中心とする産業都市の周縁に組み込んでいくことになる。

② 大学町

この谷保村の北に広がる一面の雑木林（それは村人が落葉や薪などの森林資源を採取する場所で、「ヤマ」と呼ばれていた）に「大学町」を建設するという計画が浮上するのは、大正時代の末期、関東大震災後のことである。箱根土地株式会社、社長・堤康次郎と専務・中島陟が主導するこの計画は、谷保村北部約100万坪を会社がまとめて買収整備し、立川と国分寺のあいだに新駅を設け、東京商科大学（現・一橋大学）を招致して、理想的な学園都市を建設するというものであった。駅前のロータリーから放射線状に延びる主要道路、そのあいだをつなぐ碁盤目の街路、大学や学校のキャンパスを中核とした文化的な街並み、街路樹を植えこんだ公園道。これは、ヨーロッパの大学街を参照しつつ、満州における新都市建設プランと連動しながら、「帝都復興事業」として構想されたものである⁴。中央線の新駅は1926年（大正15年）4月1日に開業し、「国立（くにたち）」と名づけられる。同年、「国立学園小学校」、「東京高等音楽院」（現・国立音楽大学）開校、1927年（昭和2年）から「東京商科大学」の移転開始、1928年（昭和3年）滝乃川学園移転。こうして現在の文教都市・国立の基礎となる街並みが、昭和初期に形成されていく。

このように、国立は、まったく成立過程の異なる、その生活空間としての性格を異にする二つのエリア（谷保と国立）から構成されることになった。そして、戦後になって、両者の中間に「団地」が建設される。

③ 団地

周知のように、急増する都市人口の居住地確保が政策課題となる中で、日本住宅公団が発足したのは1955年のことであった。そして、その翌年（1956年）には、国立に団地建設の計画が浮上し、国立町の田島町長はこれを積極的に誘致していく。町長は、「勤労階級住宅」の建設を進めることによって、南部（谷保地域）と北部（大学町）を「繋ぎ合わせてまとまりをつけ」ることを狙っていたという。用地の確定と買収に難航したものの、1963年にいたってようやく事業認可が下り、1965年から「富士見台団地」への最初の入居が始まる。近世来の農村地帯であった谷保と、関東大震災後の「帝都復興事業」として構想された「大学町」のあいだに、都市型の集合住宅（団地）を核とした新しい町が形成される。それは、住人の階層性においても、居住の基本的な様式においても、谷保地域に対して、また大学町に対しても異質な居住空間を形成する。

先に見たように、南武線の谷保駅から北に向かうと、すぐに富士見台団地にいたるが、これを抜

国立駅と一橋大学を中心に構成される「文教地区」、南部の「旧谷保村」地区、そしてその中間に帯状に広がる「団地」を中心とした地区という三つのゾーンから、市域は構成される。そのゾーン間の境界が（地図上にも、実際に町を歩いてみても）きわめて明確に見えるのが国立の特徴である。町の歴史的形成過程の違いが、家並みの外観上の差異として現れており、道ひとつ渡るとがらりと雰囲気の違う街区になる。本稿の文脈においては、「富士見台団地以北」のゾーンと、「以南」のゾーンとの落差が最も重要な意味をもつことになるが、上の図からも、この二つのゾーンを分けているのが「崖線」と「南武線」、そして「甲州街道」という三本の「境界線」だということが分かるだろう。

（3）浄／不浄の境

本稿の主題との関連において、地域の形成過程に即してもう一点注記しておくべきことがある。それは、戦後の国立市における「浄化運動」の歴史についてである。

この「浄化運動」が生まれるのは、南北の住人による（旧谷保村地域と国立駅を中心とする新開地との）論争の末に、「国立町」という新しい町名が定められた1951年（昭和26年）直後のことである。その前年（1950年）には朝鮮戦争が勃発し、その影響がこの地域にも波及してくる。立川町には、多数のアメリカ兵が駐留し、飲食店やホテル、キャバレーなどが立ち並ぶようになり、米兵相手に体を売る女性たちの姿も増えることになる。その結果「国立駅周辺」にも「アメリカ兵相手の簡易旅館や飲食店が出現し、いかがわしい商売を始めだした」（国立市史編さん委員会、前出：226）という。

ホテルのなかには「ここはモンキー・ハウス〔売春宿〕です」などと書いた看板をかかげるものまであった。（…）下宿屋がそれまでいた学生を追い出して、ホテルにくら替えするところもあった。そのうち、子供が銭湯で性病に感染したとか、ホテルの前でゴム製品で遊んでいるなどといった噂が町内に流れてきた。さらに米兵相手の私娼（オンリーさん）が一軒家に住みつくようになると、井戸水が汚染されはじめた。彼女らは日本式の便所を水洗トイレに改造して、汚水をどんどんたれ流しはじめたからである。（同上：226-227）

これに対して、国立市内の知識人や主婦が中心となって対策が話し合われ、「掃除をするという意味を込めて」自分たちの活動を「浄化運動」と呼ぶようになった。これが、1951年のことである。「国立町浄化運動期成同志会」には、学生部、婦人部も設けられ、住民の署名集め、国立駅前でのピラ配りなどの活動を展開した。同志会の会長・松岡義雄は『毎日新聞』の取材に応じて、次のように運動の動機を語っている。

国立町は純粋な学園都市で、父兄も国立町の環境がよいので入学させているのに最近いかがわしい商売が急速に増加し、文教地区の環境が破壊された。駅付近に稲荷神社を作って門前町に特殊飲食街を建

設しようとする計画もあり、青少年の教育上重大な問題になってきたので、一斉に立ち上がったわけである。国立町を文教地区にするのが根本問題だ。（『毎日新聞』1951年5月15日→国立市史編さん委員会1990：230-231）。

町議会はこの運動を受け、風俗営業の締め出しに「積極的に動く」方針を決め、これに続いて、「東京都文京地区建築条例」にもとづく「文教地区指定」の獲得に動く。賛成・反対派双方の激しい論戦の末、翌1952年には正式の指定を得るにいたる。国立駅を中心とする広域のエリアは、「待合、料亭、カフェー、料理店、キャバレー、舞踊場、舞踊教室所」、「ホテル、旅館」「劇場、映画館、演芸場、観覧場」などの建設に制限のかかる地域となったのである。

この運動の経緯は、国立町民の市民意識の高さを物語ると同時に、大学町（学園都市）としての地域意識が住民の自己評価において大きな意味をもっていたことを示している。「理想の学園都市」「健全な教育環境」を守るために、市民が立ち上がって「風俗営業」や「特別飲食店」を排除する町。それが「国立」である。

しかし、私たちはここで、その活動に「浄化」という言葉が用いられていることに留意しておかなければならない。それは、自分たちの町の外から侵入してくる「いかがわしいもの」「けがれたもの」をシャットアウトし、地域をクリーンな状態に保ちたいという意識の表れである。そして、この文脈においては、外部にある（「いかがわしい」者たちの）テリトリーが隣町・立川に代表されていた。したがって、浄化運動に関わる国立町民が持ち込んだ「象徴コード」をそのまま図に示してみるならば、「学園都市・国立」と「基地の町・立川」のあいだに、次のような「浄／不浄」の対立関係が設定されることになる。

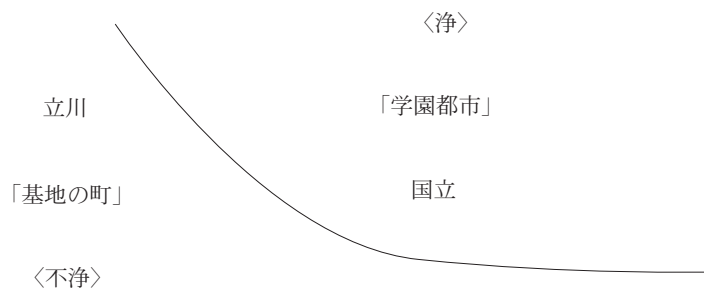


図5：「国立町浄化運動」の象徴的空間図式

この図式が、どこまで国立町・市民の意識を反映していたのかについては、実証的に検証のしようがない。しかし、「運動」そのものが、こうした対照構造を前提として展開されたことは否定できないだろう。この枠組みにしたがう限りにおいて、「国立」から「立川」へと移動することは、「衛生的」で「文化的」な自分たちの居住区から、「あやしげ」な「穢れ」に満ちている遊興地区へと越境していく、という意味をもつことになる。

5. 「町」を歩く

このように、私たちが「物語の舞台」として想定した地域の地理的、歴史的な成り立ちをたどって行くと、その空間の中にいくつもの「境界線」が走っていることに気づく。それは、国立と立川の「行政区分」上の境界であり、同時に「学園都市・文教地区」と「基地の町・遊興地区」の境界であり、近代的な「都市計画」にもとづく居住区と近世以前からの「村」の生活に根ざした地域の境であり、さらには、軍事基地として利用されたエリアと農村地帯との接触面でもあった。そしてそこには、多摩川の流れが形成した「崖線」という自然地理学上の境界が密接に絡み合っており、この幾重にも重なった「境」を象徴的に集約するかのようには、「鉄道」と「街道」が東西に走っている。

この多層的な「境」を越えて往還するという行為が、この地域、あるいは空間との関わりにおいてどのような経験を可能にするのか。これが『犬婚入り』という作品の成立を読み解く上で鍵となる問いである。この時、とりわけ北から南へ移動する「子どもたち」の視線を獲得することが、この「町」を歩くために必要な作業だということになるだろう。

(1) 「キタムラ塾」を探して——「南区」の時空間

一般に、“子どもたち”が自分の生まれ育った地域について構成していく身体化された空間図式には、しばしば“テリトリー”の感覚がともなっている。自分たちの“縄張り”として自在に動き回ることのできるエリア。それは、学区のような制度的に設定された空間に折り重なりながら、自宅と遊び場とよく訪れる店や塾などを結び合わせるようにして、共同主観的に形作られる。団地のような比較的規模の大きな集合住宅であれば、その敷地がそのままテリトリーとなることもある。そして、“子どもたち”にとっては、このエリアを越えて外に出ていくということが、それだけですでに小さな冒険である。同じ空間図式を共有していない“大人たち”の目には見えていないとしても、“境界線”がそこかしこに張りめぐらされていて、その向こうに足を伸ばす時には少なからぬ緊張感が生じている。

『犬婚入り』の「町」に暮らす子どもたち——さしあたり、富士見台団地や矢川北アパートに暮らしていた子たちを想定しておこう——にとって、どこまでが自分たちの陣地であったかは確かめるすべがない。しかし、団地を出て、南に向かい、踏切と街道を超え、多摩川に向かって下りていくという行程に“越境的冒険”の感覚が付随していたことは想像に難くない。その子どもたちの視線を想像しながら、“私”もまた「南区」に足を踏み入れていくことができる。

テキストには、「子供たちは塾へ行く日が来ると、まるで団地の群れから逃れようともするよように、せかせかと多摩川の方向へ向かい、広い自動車道路を渡って、神社の境内の隣を通過して、梅園をこっそりくぐりぬけて近道し、北村みつこの家の垣根の壊れたところをくぐりぬけて、庭に跳び込んで行く」(90)と記されている。実際に、試しに富士見台第一団地に起点を置いて、谷保駅の東側の踏切を超えるルートを取り、甲州街道を越えて右に折れ、少し歩くと谷保天満宮の東の端

にたどり着く。そのわきの坂道を下っていくと確かに「梅園」があり、これを抜けると境内の最下部に通じている。「団地」から「塾」までのルートの記述において、テキストは現実の場所をかなり正確になぞっている。

ただしそれは、谷保天満宮の境内に隣接する家がただちに「キタムラ塾」のモデルであるということの意味するわけではない。もとより、作品の中では「塾」として使われた家は取り壊されてしまっており、それがそのままの姿で現存するはずもないのである。むしろ、「キタムラ塾」は、「南区」に相当するエリアのあちこちに点在する何軒もの民家のイメージを重ね合わせて造形されたものだと見る方がしっくりくる。例えば、『犬婚入り』を映画化するつもりにもなって、“ロケ地”を探し回る目線で歩いてみると、「塾」にふさわしく思えるような構えの家を、とりわけ「崖線」の下から多摩川までのゾーンにいくつも見いだすことができる。それはたいていの場合、かつては農家であったと思われるが、さほど大きな構えの屋敷ではなく、低い石壁か生垣に囲われた小ぶりの木造の民家で、それでも前庭があり、人の出入りを強く拒絶することのない「開放性」を保っている。その縁側か玄関先に座って本を読んでいる、あるいは爪を切っている「北村みつこ」のイメージを重ね合わせてみても、まったくの違和感のない家があちこちにある。したがって、この家こそが「キタムラ塾」だという形で特定することが問題なわけではない。私たちにとって重要なことは、「北」の「団地」から、「キタムラ塾の家屋」が点在するエリアに足を踏み入れることで「子どもたち」が何を感じるのか、を想像することにある。

この時、彼ら／彼女らがその身体的な感覚において感じ取るのは、おそらく、エリアによって空間と時間の結びつき（クロノトポス）がまったく別様のものとなる、ということである。それは、空間的実在の相貌に表れる記憶の厚み、あるいはその手触りがまったく違うということでもある。子どもたちが暮らしている場所にも、団地の開発が始まるまでは雑木林が広がり、それは谷保村の人々にとっては「ヤマ」として認知される生活空間の一部であった。しかし、団地に入居した住人たちがその痕跡に触れる機会のごく稀ではないと思われる。そこは、過去の生活の記憶をきれいに払拭し、歴史性ゼロの状態から構築された場所、その意味で“モダンな”時間の流れる空間である。もちろん、団地に生まれ育った子どもたちは、その現実をごく当たり前のもので受け止めていくだろう。彼ら／彼女らが時間を経験する様式が、「団地」という空間の形式によって規定される。ここに、身体化された「時空間の認知図式」（団地のハビトゥス）が構成されていく。

これに対して、「南」エリアでは、人々の住まう空間そのものの中に過去が現前する。曲がりくねって錯綜する狭い道筋も、その両側に続く生垣や石垣、あるいは水路なども、その形態学的構造や物質的質感の中にかつての生活ぶりをうかがわせる。景観は記憶を宿し、その過去の重みを引きずっていささか鈍重な（可塑的な造形に応じない）ものとなっている。その意味で「南区」は、フランスの歴史学者 P. ノラが言う意味での「記憶の環境（milieu de mémoire）」を構成している。それは、生活空間そのものの中に過去の記憶が息づいているような状況を指すものである。

「記憶なき郊外」としての団地から、「記憶の息づく環境」への参入。その経験はおそらく、自分たちが生まれ育った場所、生活を取り巻く空間が、時空間の結びつきに関するさまざまな可能性の

中のひとつの現働態でしかないということに気づかせてくれる。当たり前だと思っていた「時空間の経験」の形式が、他の可能性の排除の上に成り立っていること、言い換えれば、その形式を身体化していることがすでにひとつの枷であり、罫であると気づく。「越境」は、そのような意味で、慣れ親しんだ「住処」を「よそよそしい」相貌を備えた場所として意識させる効果をもつ。

さらに言い換えれば、それは、境界を挟んでこちらと向こうとでは、異なる歴史性の上に、異なる「生活世界」が広がっているということである。A. シュッツが論じたように、それぞれの「生活世界」には、慣習的实践の積み重ねの中で蓄えられた手持ちの知識にもとづいて、お互いの行為が解釈されていく固有の様式が存在する。こちら側では「当たり前」のものとして理解される行動が、あちらの側では「不可解」なふるまいになりかねない。「生活世界」の境界は、そのような意味で、相互理解の共約可能性に断裂を生じさせる。

作品の中で、団地に暮らす母親たちが、「塾」での「北村みつこ」のふるまいをうまく理解できず、的外れな解釈をくり返していたことを想起しよう。例えば、「塾」から帰ってきた子どもたちが、「北村先生がね、一度使った鼻紙でもう一度鼻を拭くとやわらかくて暖かくてシットリして気持ちがいいですよ、そうやって二度使った鼻紙を、三度目には、お手洗いでお尻を拭く時に使うと、もっと気持ちがいいですよって言っていたよ」(81)と報告する。すると母親は「顔を赤らめ、何をどう叱っていいのかが分からないままに息を切らして」、「〈鼻紙〉なんて言葉おかしいわよ。〈ティッシュ〉と言いなさい」という変な注意をしてしまったり、「北村みつこが汚いことをわざと言ったりするのは、教育上の理由があつてのことではないか」(82)と考えてしまったりする。あるいは、子どもたちが〈犬婿入り〉のお話を聞いて帰ってくると、「教科書にさえ出てこないような話を子供にうまく話すことができる先生はユニークだ」(86)などという場違いな評価を交わしたりする。この時少なくとも、北村みつこの行動が、母親たちがそこに無理やり読み取ろうとしているような“教育的な意図”にもとづくものではないことは明らかである。彼女は、「鼻紙」の使い方にせよ、物語にせよ、経験の中で身に着けてきた「知恵」を、彼女なりのやり方で伝えているだけだと読むのが自然である。ところが、それをそのままのものとして受け止めることができない。そこに、「団地」の母親たちの世界と、「キタムラ塾」的世界のあいだの(生活世界としての)断層が表れている。もちろん子どもたちもまた、その「団地的」な感受性を身体化しているのだが、彼ら／彼女らは、その落差に戸惑いと少しの興奮を覚えながら、「異世界＝異界」へと嬉々として飛び込んでいくのである。

(2) 「水域＝聖域」としての「南区」

「北区」から「南区」へ境を越えていくということは、「崖」を下るということである。武蔵野台地を削りながら水流を南に移していった多摩川がその北岸に残した段丘(青柳段丘)が、「町」の北と南に高低のコントラストを与えている。したがって、「団地」の子どもたちにとって、「塾通い」の道筋は向こう側の世界に“下りていく”感じのものだったはずである。

そして、その崖の下には必ずと言ってよいほど“水”が湧き出し、あるいは流れている。「南

区」に足を踏み入れていく時、最も強く印象づけられるのは、その水の豊かさである。段丘の崖からは、関東ローム層の下に伏流化していた“水”が地表にしみ出しており、そこから幾筋もの水流が、木立や草むらの陰に隠れながら民家の裏や畑のわきを走り、現在はしばしば遊歩道として整備され、心地よい空間を形成している。そして、いくつかの地点で、その水の湧き出す場所、水のたまりが「聖域」となり、鳥居が建てられ、神社として継承されている。



〔9〕 矢川弁財天（立川市羽衣町）



〔10〕 ママ下湧水（国立市矢川）



〔11〕 谷保天満宮裏の聖水（国立市谷保）

作品中には、いたる所に見られるこの小さな水流や水源への言及はなく、ただ「多摩川」が「町」の南端に位置づけられているだけである（しいて探せば、「南区に団地の子供たちが出かけて行くのは、以前は（…）カエルの観察の時くらいだった」（90）という記述に“水辺”の存在が示唆されていると言えるかもしれない）。しかし、実際にその場所を訪ねてみると、いくつもの湧水や、「残堀川」、「根川」、「矢川」といった多摩川の支流（残り川）や、ほとんど暗渠となってしまった玉川上水からの分水（柴崎分水）の作り出す水辺の風景こそが、物語の舞台にふさわしいものとして現れてくる。

水のたまりは、その象徴的意味作用において記憶の憑代でもある。地下に伏流し、人々の目に触れずにいた“水”が、ふたたび“表層”に浮かび上がる場所。地上の景観が人間の手によって次々と作り変えられていっても、「泉」や「井戸」はいつも同じ場所にとどまり、そこに水をたたえ続ける。そこには、地表において営まれていく人々の生活の時間とは、明らかに異なるリズムとスケールで流れる（あるいは滞る）古い時間が宿る。したがってそれは、“空間”の裂け目であると同時に、“時間”の断層が露出するところでもある。そして、この断層が、「北区」と「南区」との最後の境界を形成する。“水”は、人々の生活空間を分かつ一線でもあるのだ。

この多層的な境界性ゆえに、水域は聖域化する。聖域とは、地上の世界と異界の接触面でもある。それは、この世のものならざるもの（異類）が入り出す場所となる。あるいは、地上の世界に生きていた者が、異界のものに変身することのできる空間が、そこに現出する。「キタムラ塾」の所在地を谷保天満宮の裏手と想定するにせよ、矢川緑地の近くに位置づけるにせよ、そこは湧水のほとり、小さな水の流れに近接する場所であったことになる。物語空間を、説話的空間に変容させるべく登場した「犬」は、この「水域＝聖域」にこそふさわしいものである。

(3) 物語空間のトポグラフィー

ここで、想定されるエリアの現実の空間構成を取り込みながら、「町」の南北の断面図をモデル化して描いてみよう。

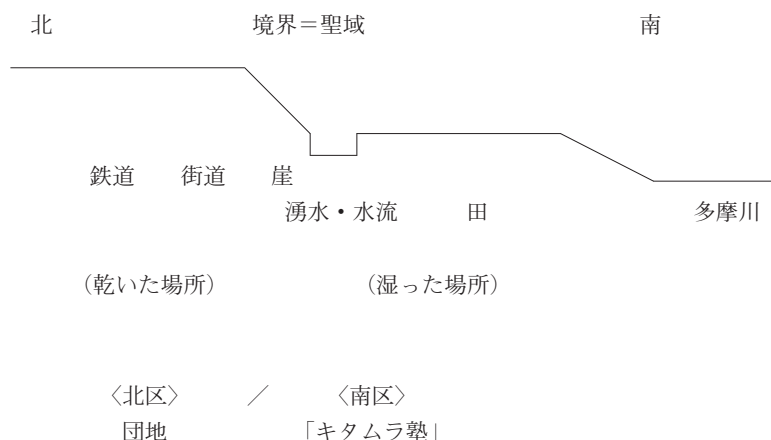


図6：「町」の南北断面図

段丘が形作る「崖」を境界として、「町」は、「高いところ／低いところ」に区分され、同時にそれは、「(現実的にも、象徴的にも) 乾いた場所／湿った場所」に対応している。そして、その崖の上の高台には、「北」と「南」を分かつ人為的な境界線として、「街道」と「鉄道」という二筋の「道」が走っている。人は、これを渡り、またぐ形で、「北」から「南」へと移動する。崖を下りて南側には、狭く蛇行した農道と、河原に作られた獣道がうねうねと走っている。対照的に、「道」の北側には、直線的な道路の両側に団地が立っている。小説『犬婿入り』のテキストは、この現実の「地理的／象徴的」な対照性をさらに誇張し、戯画化して、南の水辺に闖入する異物＝異類が、町に「古いものの記憶」をまき散らし、そして去っていく物語を語っているのである。

6. 境——物語を生み出す場所

だが、それにしても、この“境”を越えていくというふるまいを契機として、なぜ(「犬」たちの、「異類」たちの)物語が生起するのだろうか。前節において私たちは、聖域には異界のものたちが出入りするものだと、いささか簡単に記してしまった。しかし、そこにはもう一步踏み込んで問われるべきことがある。なぜ“境”の場所は、地上の物語には包摂できないものたちを呼び寄せるのか。これを改めて問い直してみよう。

それは、“越境”の度ごとに私たちが“否定的なもの”の触発に出会うからだ。これがひとつのありうる答えである。ここまでの考察を延長して言えば、“越境”とは“生活世界 A”から“生活世界 B”へと移動することであるのだが、それぞれの世界は、それぞれの言葉でその空間の中に存在しうるものたち（現実のものたち）を名指し、それら“実在者”たちによって構成される。だが、そのようにして“語りうるもの”として作られた世界は、彼らの言葉では語りえないものたちの“排除”あるいは“不可視化”の上に成立している。だから、越境してみたところで、向こう側の世界に入ってしまうえば、“見えないもの”はやはり“見えない”ままであり、それが“見えてしまう”わけではない。私たちは“A”から“B”に移行することはできても、その「間」^{あいだ}に立ち続けることはできないのである。それでも、越境の事実を通じて、私たちは、「間」に立つ限りにおいて“見える”ものが存在することを受容する。越境者に出来ること（同時に、課せられること）は、その何者かの気配を語ることに尽きている。「飯沼」が「犬」に生まれ変わる瞬間、「北村みつこ」がその「犬」の侵入を許してしまう瞬間。そこに「越境」の事実が告げられている。その瞬間にだけ垣間見える、あるいはほのめかされる“存在”の記憶を言葉にしようとするれば、私たちはそれを、（次元の異なる）物語に託すしかない。私たちに“物語り”をうながすのは、この、生活世界の裏側に密かに憑りついているものたちだ、と言い換えてもよいだろう。

ここで、“場所”という言葉の二重の意味を確認しておく必要がある。先に私たちは、生活空間に物語的意味を充填された時、それは“場所性”を帯びると論じた（物理的空間に対する、生きられた意味空間としての“場所”）。しかしそれは、物語との関係において“場所”がふるう力を考えると、まだその一面しかとらえていないように思われる。人々は、その“意味”に満ちた物語世界（＝現実空間）の外に、その語りには包摂されなかったものが生きていることを知っている。そのものたちの気配を語るためには（つまり、そのものたちが排除されている事実を語るためには）、もうひとつの（いくつもの）物語を必要とする。越境が物語の“原因”となるのは、そのつど、危うい存在の影を受容させるからにはかならない。“物語を生み出す場所”は、充実した意味世界（としての生活世界）の亀裂にこそ見いだされる。

“郊外”と呼ばれる空間は、構造的に“境”の場所を産出する。古い様式に根ざした生活空間の上に、別様の様式性をもって構築される新しい居住地を作り出していくことが、郊外化のプロセスにはかならないからである。その“境”がどのような形で可視化しているのかについては、地域ごとに大きな差異があるだろう。しかし、よく目を凝らして歩いていけば、街区の周辺に必ず越境の場所が現れる。その一線を越える瞬間にだけ見えるもの呼び込むことができる者は、“物語の語り手”となっていく。そして、その“物語”は、現実の世界にほんの一瞬立ち込めたかすかな災厄の気配を記憶し、形象化していく。

国立に生まれ育った多和田葉子が、これまでに見てきたような「町」の断層を何度も踏み越えながら子ども時代を過ごしたことは、たぶん間違いない。そして、彼女はやがて、立川の高校に通うことになる。日々の通学は、どこをどう通っていくにしても、ここで私たちがあとづけてきた“境”を超える道筋になる。この経験に、そののちの「越境の作家」としての原型があったと見る

のは、いささか安直かもしれない。しかし、この「町」の歴史的な成り立ち——存立構造——が、『犬婿入り』という物語の“起源”となっていたこと。ひとまずそこまでは確認できたのではないだろうか。『犬婿入り』は場所をめぐる物語であると同時に、場所が生みだした物語でもある。

【注】

- (1) ただしそれは、“虚構”の物語が“現実”の意味世界の破綻や欠損を“補完”したり、“現実”の矛盾を“埋め合わせ”たりするというを必ずしも意味しない。むしろ“現実”空間に経験される緊張は、新たな物語を呼び起こす“きっかけ要因”，F. ドレツキの言葉を借りれば「起動原因」（Dretske 1988）となるものであり、そこからどのような物語が立ち上がっていくのかの関しては、そのつどの成り行きの中でたどってみるしかないだろう。
- (2) 砂川地区は、地図を見ると、道路がかつての「田」の形を残して走っていることが分かる。この一帯は風が強く、砂塵の被害が大きかったため、屋敷の周りに防砂林を植え、家の裏手に短冊形をした細長い田畑を作ってきた。その名残が今も地形の中に鮮明に刻印されているのである（立川市史編集委員会 1969）。
- (3) 国立市の産業別人口の推移を見ると、1950年には、農業人口が21.3%であったが、1965年には3.4%に縮小している（国立市史編さん委員会1990：354）
- (4) 木方十根は、建築史の視点から、国立大学町の設計においては、「キャンパス用地の形状および寸法が優先的に確定され、街区の寸法は従属的に決定されていた」（木方 2010：53-54）こと、すなわち、「国立大学町とは、あくまで『大学移転』を主とし、『住宅地開発』を従とした事業である」（同上：54）ことを明らかにした上で、この町づくりの基本的な構想は、「東京商科大学という都市施設の建設」を通じた「帝都復興事業」（同上：58）であったと推論している。他方、長内敏之（2013）は、国立の大学町の建設は結果として満州国の建国に先んじることになったが、「整然たる放射線道路の構想」は、「満州国・新京」の都市計画を参考にしたものだという説に支持を示している。後先はどうあれ、その設計思想において、中央線・国立駅を中心とする街区の設計と、満鉄長春駅を中心とするそれとが類似の思想にもとづいていることは明らかであるように思われる。

*文中に挿入された写真はすべて筆者撮影（2013年11月）

【参考文献】

- Casey, Edward S. 1998 *The Fate of Place: A Philosophical History*, University of California Press. (江川・堂園・大崎・宮川・井原訳『場所の運命 哲学における隠された歴史』, 新曜社, 2008年)
- Dretske, Fred 1988 *Explaining Behavior, Reason in a World of Causes*, The MIT Press. (水本正晴訳『行動を説明する 因果の世界における理由』, 勁草書房, 2005年)
- 川本三郎 2012 『郊外の文学誌』, 岩波書店
- 木方十根 2010 『「大学町」出現 近代都市計画の錬金術』, 河出ブックス
- 国立市 1996 『国立市都市景観形成基本計画』, 国立市

- 国立市史編さん委員会 1990 『国立市史（下）』, 国立市
- 国立市民具調査団（編） 1983 『国立の生活誌——古老の語る谷保の暮らし』, 国立市民具調査団・国立市教育委員会
- 前田 愛 1982 『都市空間の中の文学』, 筑摩書房 →ちくま学芸文庫版, 1992年
- 長内敏之 2013 『「くにたち大学町」の誕生——後藤新平。佐野善作・堤康次郎との関わりから——』, けやき出版
- 中沢新一 2005 『アースダイバー』, 講談社
- Nora, Pierre (éd.) 1984 *Les Lieux de mémoire*, vol.1, Gallimard. (谷川稔監訳, 『記憶の場1』, 岩波書店, 2002年)
- Relph, Edward 1999 *Place and Placelessness*, Pion Limited. (高野・阿部・石山訳『場所の現象学 没場所性を越えて』, ちくま学芸文庫, 1999年)
- 首都大学東京都市教養学部都市政策コース 2008 『景観形成とまちづくり——「国立市」を事例として』, 公人の友社, 2008年
- 鈴木芳行 2012 『首都防空網と〈空都〉多摩』, 吉川弘文館
- 立川市教員委員会 1977 『立川市のあゆみ』, 立川市教育委員会
- 1984 『立川の歴史散歩』, 立川市教育委員会
- 立川市向郷遺跡調査会 1992 『東京都立川市向郷遺跡』, 立川市教育委員会
- 立川市大和田遺跡調査会 1983 『東京都立川市大和田遺跡』, 立川市教育委員会
- 立川市史編集委員会 1969 『立川市史（下巻）』, 立川市

<テキスト>

- 多和田葉子 「犬婿入り」, 初出1992年, 『群像』(1992年12月号), →講談社文庫版, 1998年